

2018年2月に全米で、そして3月には日本でも『ブラックパンサー』（2018年）が公開された。映画は空前の大ヒットとなり、興行成績で様々な記録を破っていった。いわゆるスーパーヒーローが主役のエンターテインメント作品であり、『アイアンマン』（2008年）、『アベンジャーズ』（2012年）、『シビル・ウォー／キャプテン・アメリカ』（2016年）、『スパイダーマン・ホームカミング』（2017年）などと肩を並べる、押しも押されぬ「マーベル映画」であることから、大ヒットは当然のことであるように思われた。しかし、今回ばかりはちよつと趣が違うのだ。『ブラックパンサー』は、ハリウッドの「黒人が主役の映画は世界で売れないのでヒットしにくい」という定説に当てはまってしまっただけだ。しかし、今回は違った。黒人監督による黒人が主役の映画で、映画史に名を刻む大ヒットを叩き出したのだ。そして、ハリウッドの人々はこう思った。「ブラックムービーなのに……」。

そう。「ブラックムービー」は、アメリカ黒人の歴史と同じく世間から虐げられてきた。黒人が主役、黒人が監督というだけで、制作予算は下げられ、上映館数も極端に減らされてきた。それどころか、公開にたどり着くことすら難しく、制作は見送られ、デンゼル・ワシントンやウィル・スミスというごく一部のスターを除いて、黒人に主役が与えられることはなかった。

そもそも映画の歴史が始まった時、黒人には作品を作るチャンスや演じるチャンスが全くなかった。黒人をキャストイングするどころか、白人俳優が顔を黒く塗って黒人を演じる「ブラックフェイス」が用いられ、「黒人は怠け者で臆病」というレッテルを一方的に張られ、間違った愚かな姿を晒されてきた醜い歴史があり、彼らは傷ついていたのだ。

では、どのようにしてブラックムービーが誕生したのか。彼らは自分たちで映画を作ること学んだのだ。少しでもその歴史を振り返ってみよう。

最初に立ちあがったのは、サウスダコタ州の片田舎で小作人として農業を営んでいたオスカー・ミシヨールという青年だった。彼は農業生活を1冊の本にまとめ、それを『The Homesteader』（1919年／日本未公開）という映画作品にした。その頃、D・W・グリフィス監督による映画の歴史を変える大作『国民の創生』（1915年）が世間を席巻していた。『国民の創生』は「映画の技術を向上させた」と言われるほど画期的で大金が使われた大スペクタクル映画であったが、劇中でブラックフェイスが使われ、白人至上主義団体クー・クラックス・クラ

ン（KKK）を称賛し正当化する作品であった。この頃、この映画に触発されて全米各地で新たにKKKが次々と設立され、黒人へのリンチ事件が相次いで起こった。そこでミシヨは、2作目に『國民の創生』へのアンサー作品として『Within Our Gates』（1920年／日本未公開）を完成させた。本作ではアメリカ南部を舞台にし、黒人女性を悲劇のヒロインとして描き「人が愚かなのは人種のせいではない。それは個人の問題なのだ」と主張している。技術的にはグリフィス監督には到底及ばなかったものの、観れば今でも人々の心を揺さぶるメッセージ性に優れた作品だ。

こうして誕生したアメリカの「ブラックムービー」は、いつも政治的であった。オスカー・ミシヨの作品『Body and Soul』（1925年／日本未公開）でデビューしたのが、歌手としても知られるポール・ロブソンである。彼はロシア旅行などを経て、共産主義を排他するハリウッドの赤狩りでブラックリスト入りの憂き目に遭い、アメリカでは映画に出演することが出来ず、30年代後半からはイギリスで映画に出演しなければならなかった。

ポール・ロブソンの次に誕生したスターがシドニー・ポワチエである。彼は『野のユリ』（1963年）でアカデミー賞主演男優賞に輝いた。『カルメン』（1954年）や『バナナ・ボート』^{*1}で歌手としても知られるハリー・ベラフォンテは、ポワチエの親友で俳優としてのライバルでもあった。ベラフォンテは、ロブソンに師事し、社会的・政治的な活動にも積極的だった。ベラフォンテに誘われて、ポワチエも50年代から始まる公民権運動に参加するようになり、その運動のリーダーであるマーティン・ルーサー・キング・ジュニア牧師とも交流を育んだという。ベラフォンテとポワチエは、人種差別が蔓延^{はびこ}る南部の危険な場所にプライベートジェットで飛んで、不当逮捕された黒人の保釈金を支払ったこともある。白人に従順な役を演じることが多かったポワチエは「ショーケースの黒人」と呼ばれて揶揄されることもあったが、実際はそんなことなど全くなかったのだ。

やがて時代が「ブラックパワー」の70年代に入ろうとする頃、フランスで作家として活動していたのがメルヴィン・ヴァン・ピーブルズだった。アメリカで生まれた彼はもともと「映画を作りたい」という情熱を持っていたが、当時のハリウッドで黒人が映画を作ることは不可能だったので、まずはフランスで本を出版する道を選んだ。フランスで作家としての地位を確立した彼は、念願かなって映画『The Story of a Three-Day Pass』（1968年／日本未公開）を完成させた。アメリカに戻り、大手コロムビアにて『Watermelon Man』（1970年／日本未公開）も制作。その後、大手から引く手あまただったが、全てのオフアを断り自主制作で完成させたのが『スウィート・スウィートバック』（1971年）だった。自分が望む通り映画を制作したメルヴィン・ヴァン・ピーブルズ。自主制作で数少ない上映館数だったのにもかかわらず、

連日大盛況で、インディペンデンス映画として歴史に残る興行成績を達成する。やがて、ハリウッドは「ブラックスプロイテーション」と呼ばれる「黒人が主役の、リベンジをテーマにしたアクション映画」を量産していくことになる。

と、若干駆け足で乱暴ながら、黎明期から70年代までのブラックムービーの歴史を綴った。本書は、80年代以降の重要作品の背景を詳細に解説し、ブラックムービーが今までの流れからどのようにして『ブラックパンサー』にまでたどり着いたのかを探索していくのがテーマである。『ブラックパンサー』は、単純に「面白かったから大ヒットしたブラックムービー」ではない。先人たちの長い闘いの末に生まれ、まさに記念碑的作品なのだ。

ところで、ここまで散々「ブラックムービー」と書いてきたが、なにをそう呼ぶのか、実は一番難しい。黒人監督の作品をそう呼ぶのか？ それとも黒人が主役の作品をそう呼ぶのか？ それともその両方が携わっている作品のみをそう呼ぶべきなのか？ 黒人といえども、いわゆる「アフリカ系アメリカ人」なのか？ 現在多くなっている、自らの意思でアフリカからやってきた移民や、アメリカ生まれの移民2世のアメリカ黒人はどうか？ 本書では、その考察もじっくりしていきながら、なぜアメリカで「ブラックムービー」と呼ばれている映画作品が存在しているのか？ そして、なぜ人々は「ブラックムービー」に魅了されるのか……その

作り手たちがこれから進む道は？ など、徹底的に解明していきたい。

*1…日本では、野球選手の野茂英雄がメジャーリーグ進出した際の応援歌が替え歌として使用したことで知られる曲。

ブラックムービーガイド——目次

はじめに 2

CHAPTER 1

1980年代 11

ブラックムービーの「顔」スパイク・リー……………	12
インディペンデンス系の監督たち……………	28
80年代の黒人スターたち……………	37
白人監督によるブラックムービー……………	52
ヒップホップ・ムービーの誕生……………	63

CHAPTER 2

1990年代 69

ブラック・フィルム・ルネッサンス……………	70
ヒップホップ映画とブラックスプロイテーション・シヨンの再評価……………	92
ジョン・シングルトン・イン・ザ・フット……………	106
スパイク・リーとマルコムX……………	117
90年代のスーパースター……………	136
女性たちを描いた作品……………	151
黒人スーパーヒーロー……………	165

CHAPTER 3

2000年代 175

ネオブラックムービーの台頭……………	176
アカデミー賞への長い道のり……………	185
黒人プロデューサーの活躍……………	201
2000年代のヒップホップ映画……………	211

CHAPTER 4

2010年代

227

若手黒人監督の活躍……………

『ムーンライト』とアカデミー賞……………

新世代のコメディアン、ケヴィン・ハート……………

『ストレイト・アウタ・コンプトン』と『ゲット・アウト』……………

『ブラックパンサー』のライアン・クーグラー……………

未来を担う注目の若手俳優……………

286 268 261 254 240 228

CHAPTER 5

TVシリーズ・ガイド

299

あとがき

314

CHAPTER 1

1980年代

エディ・マーフィーと全く同じ俳優が必要だって？

なんで僕自身じゃダメなの？

で、結局僕に役は貰えなかったって？

——ボビー・テイラー

They want an Eddie Murphy type?

Why can I just act? So I didn't get it?

——*Bobby Taylor*

『ハリウッド夢工場／オスカーを狙え!!』(1987年)より

ブラックムービーの「顔」

スパイク・リー

「ファシスト」と呼ばれた監督

スパイク・リー。「ブラックムービー」というタイトルがつく本の本編1ページ目を飾るのに、これほど相応しい名前はないだろう。本書で80年代以降の作品を中心に取りあげているのも、彼の存在がそうさせた。今現在のブラックムービーの大きな流れを作ったのが彼だからだ。

自ら「僕は映画を撮るために生まれてきた」と語るスパイクは、映画史に残るような興行成績を叩き出した訳でもないし、誰もが楽しめるような娯楽系超大作の監督でもない。賞レースでの評価が期待出来る社会派・アート系監督でありながらアカデミー賞もノミネートだけで、

2016年に名誉賞を受賞したのみである。しかし、映画ファンならば誰もが彼の名を知っている。

彼の代表作のひとつで、人種間の対立と暴動を描いた『ドゥ・ザ・ライト・シング』（1989年）は、史上もつとも論争を呼んだブラックムービーだと言われている。とある白人の記者は「この映画は、公開直後に行われるニューヨークの市長選に多大な影響を及ぼすだろう。そして、もしも黒人市長候補のデイヴィッド・ディンキンズが負けたら、映画のように暴動が起きてニューヨークが火の海になる」と懸念した。スパイクにとっては同胞である黒人評論家のスタンリー・クラウチはこの映画を観て、スパイクのことを「ファシストだ」と呼ぶまで酷評した。しかし実際に映画が公開されると、ニューヨークで暴動など起きなかった。黒人の観客は、スパイクが映画で一貫して発している「目覚めよ（ウェイク・アップ）」というメッセージを読み取り、暴力に訴えるのではなく、投票をしに行ったのだ。その結果、ディンキンズが史上初の黒人ニューヨーク市長となった。

スパイクはいつも自分が正しいと思う声を、恐れずに映画に託してきた。それは時に論争を巻き起こすが、スパイクはファシストではなく、黒人の声を代表することでブラックムービーの「顔」となったのだ。もちろん、過去の黒人監督も黒人の声を代表する存在であったが、ス

パイクほど、強烈に論争を巻き起こすことで「どんな方法を使っても」声を人々に聞かせるということまではしていなかった。そういった点で、スパイクは唯一無二の存在だ。

彼の才能と偉大さを知っている観客は、最初から彼の前に映画を撮る道が拓けていたかのよう^{ひら}に思ってしまう。しかし、スパイクが辿った道は決して容易いものではなかった。有名な黒人詩人ラングストン・ヒューズのこんな詩がある。

わたしの階段には鉄がつきでいたし

むき出しだった

だけどずっと昇ってきた

時には光なんてない

だけど、おまえ、振り返っちゃいけない

苦しいからって、途中で座り込むな

わたしも今でも昇り続けている

それにわたしの一生は、水晶の階段のようなものではなかった

——ラングストン・ヒューズ「母から息子へ」より抜粋

公民権運動家マーティン・ルーサー・キング・ジュニア牧師は『黒人の進む道』（明石書店）

という著書の中で、この詩を引用しながら「これはすべての黒人に向けられた挑戦である。この昇り続けるという決意が、闇を光に変えるであろう」と記している。スパイクは挑戦し続けた。彼が歩んだ映画監督への道も、決して「水晶の階段のようなもの」ではなかったのだ。

「僕は映画を撮るために生まれてきた」という言葉がスパイクから発せられると、彼らしい自信に満ち溢れた言葉に聞こえる。しかし、意味はそれだけではない。この言葉は、自分自身を鼓舞するための強い決意でもある。彼の過去を振り返りながら、ブラックムービーの顔となるまでの歩みを探っていききたい。

アーネスト・ディッカーソンとの出会い

1957年ジョージア州アトランタ、ジャズ・ミュージシャンの父ビル・リーと学校の教員である母ジャクリーンの間^間にスパイクが生まれた。その後イリノイ州シカゴで3〜4歳頃まで過ごし、次にニューヨーク州のブルックリンに移った。大学でまたアトランタに戻り、マーティン・ルーサー・キング・ジュニア牧師の母校でもある名門黒人大学モアハウス大学に進む。この時代はブラックスプロイテーション映画^{映画}が一世を風靡していたが、スパイクはそれに夢中になることもなく、黒澤明の『羅生門』（1950年）や『七人の侍』（1954年）などを好んで

観ていたという。

モアハウス大では、将来一緒に映画制作をしていく後にプロデューサーとなるモンティ・ロスと常連俳優ビル・ナン^{*2}と運命的な出会いを果たす。卒業後は、NYU（ニューヨーク大学）の映画学科に進んだ。

スパイクはNYUで20分のショート映画『The Answer』（1980年／日本未公開）を制作する。白人至上主義を称賛する『國民の創生』（1915年）のリメイクを黒人監督が任されるという内容だったが、教授たちからは散々な評価を得て退学処分前となった。しかし、熱心な生徒として知られ、次の年からの教授のアシスタントとして雇われていたスパイクは、何とか退学を免れている。失意の中、『Sarah』（1981年／日本未公開）というアメリカの祝日のひとつでもある感謝祭のディナーを描いたショート映画を制作する。この作品から、初期のスパイク作品を支える撮影監督となるアーネスト・ディッカーソンを撮影監督として起用した。スパイクはディッカーソンとの出会いについて「アーネストを知ったことが、私にとって最も大事なことだった」と話している。そしてこの作品では父であるビル・リーの曲をふんだんに使用している。ここで初期スパイク・リー作品の原形が出来たことになる。

失意の連続から起死回生の逆転勝利

NYUでは、3年目に音入りの映画を論文代わりに制作しなければならなかった。そこでスパイクは『ジョーズ・バーバー・ショップ』（1983年）を制作する。故郷ブルックリンの理髪店を舞台にしたナンバー賭博を扱う作品である。当時アトランタにいたモンティ・ロスは、スパイクからの電話による熱烈な依頼を受け、この映画の主演を務めている（ロスは、NYに着いた途端に俳優だけでなく運転手やプロダクション・アシスタントの仕事までさせられたという）。

この映画のサウンド録音担当はNYUのクラスメイトで、後に『ブローックバック・マウンテン』（2005年）と『ライフ・オブ・パイ／トラと漂流した227日』（2012年）で2度もアカデミー監督賞を受賞したアン・リー。スパイクの話の巧みな物語とディッカーソンが捉えたイメージが合致したこの作品は、瞬く間に評価を得た。公共放送サービス（PBS）にてこの映画を観て「これこそ私を知るブルックリンそのもの」と称賛したのが、音楽評論家で後に映画監督にもなるネルソン・ジョージだった。ジョージの評価が伝わり、スパイクがアルバイトをしていたファースト・ラン・フィーチャーズの配給で劇場公開が決まった。60分程度の学生の自主作品が映画館で上映されるのは稀なことである。この映画にて、スパイクは学生アカデミー賞のドラマ部門を受賞する。まさに失意の連続から起死回生の逆転勝利であった。

大学を卒業したスパイクは彼らしく自信に満ちた大胆さで、全米映画俳優組合（SAG）に所属している黒人俳優全員に『ジョーズ・バーバー・ショップ』を観て欲しいと手紙を書いた。手紙を受け取った1人で、後にスパイク作品で重要な人物となる俳優・監督のオシー・デイヴィスはその手紙を捨てることなく保管していたそうで、そこには「いつかあなたと一緒に仕事をしたい」と書いてあったと話している。そしてこの頃に、同じNYU卒業生であるジム・ジャームツシユの『ストレンジジャー・ザン・パラダイス』（1984年）が評価されヒットしたことは、「自分たちの映画が認められた!」という励みになったという。

MVが却下され、映画の制作も頓挫

NYU卒業後、スパイクのキャリアは決してトントン拍子ではなかった。当時、MTVが誕生したことでにわか注目を集めていたのがミュージック・ビデオ（MV）の世界だ。スパイクはラップの第一人者でもあるグランドマスター・メリー・メルの「White Lines (Don't Do It)」を監督する。公園で偶然に遭った『地獄の黙示録』（1979年）等で知られる俳優ロレンス・フィッシュバーンをMVの主役に起用。コカイン撲滅を訴える曲で、フィッシュバーンがコカインを吸入するシーンにメリー・メルが所属する音楽レーベルが難色を示し、却下されてしまう（その後、スパイクが有名になった頃にDVDに収められ発売されている）。

スパイクはこの頃、『The Messenger』という脚本を書いている。この作品は、NYを舞台にした自転車のメッセンジャーの物語で、『スクール・デイズ』（1988年）のジュリアン役ジャンカルロ・エスポジートを主演に、ローレンス・フィッシュバーン共演で決まっていたが、敢え無く制作が頓挫した。この時のことをスパイクは「あの1年は地獄のような思いをした。あんな経験は2度とごめんだ。1度で十分」と語っている。

スパイクが辛酸を嘗める一方で、彼の右腕アーネスト・ディッカーソンは撮影監督として引っぱりだこの存在になっていた。スパイクとディッカーソンは2人で共に、ジョン・セイルズ監督作『ブラザー・フロム・アナザー・プラネット』（1984年）とマイケル・シユルツ監督作『クラッシュ・グループ』（1985年）の撮影に参加しようとしているが、両作品共に雇われたのはディッカーソンだけで、スパイクはかなりショックを受けている。

『シーズ・ガッタ・ハヴ・イット』の成功

大忙しだったディッカーソンの帰還を待って制作を開始したのが『シーズ・ガッタ・ハヴ・イット』（1986年）だ。「ポリアモラス・パンセクシャル（同意の元の多重的な全性愛）」という

進んだ考えをもつ独身女性が全くタイプの違う3人の恋人の間で揺れ悩みながらも、自分のライフスタイルを選択していくという物語である。この映画は自主制作で、スパイクは自ら「ゲリラ映画制作」と呼んだ。これはメルヴィン・ヴァン・ピーブルズが『スウィート・スウィートバック』（1977年）制作時に使った言葉だ。この撮影中にスパイクは日記を書いており、後に本として出版されている。^{*4} 血のにじむような努力を経て完成させた作品は、カンヌ国際映画祭でも上映され、新人賞のカメラ・ドールは逃したが、かつて存在した、若い監督作品に贈られる「ユース賞」の外国語部門を受賞している。そしてこの映画のプレミアで訪れたサンフランシスコで、同地で行われたサンフランシスコ国際映画祭で黒澤明賞を受賞しに來ていた憧れの黒澤明とも対面している。

『シーズ・ガッタ・ハヴ・イット』は、スパイクのように歴史ある黒人大学を卒業し、社会的に成功して都会で暮らす若い黒人を意味する造語「バックブー（black + yuppy）」を中心にヒット。映画を観て、オシャレなコーヒーショップで映画について議論を交わすというライフスタイルが流行した。そしてスパイクが演じたマーズ・ブラックモンのように、初期のBボーイを彷彿させるバスケットのユニフォームにナイキを履く若者も増えた。この映画の成功により、映画監督スパイク・リーとしてのキャリアが本格的に始動する。

これがきっかけで大ファンであるジャズトランペット奏者マイルス・デイヴィスの

「TUTU」のミュージックビデオの監督を頼まれたり、NBAのスターダムを駆け上ろうとしていたマイケル・ジョーダンとのナイキのコマーシャルの監督・出演を頼まれたりもした。今ではカルト的な人気CMとなっているこのコマーシャルは、ナイキ創設者の前でジョーダンが『シーズ・ガッタ・ハヴ・イット』の有名なセリフ「プリーズ、ベイビー、プリーズ」を口ずさんだのがきっかけで、スパイクに仕事が舞い込んだぞうだ。

さらに、スパイクは大手映画会社コロネビアから一緒に映画を作りたいという電話を受けた。彼は大学卒業から温めていた『Homecoming』の脚本を『スクール・デイズ』（1988年）として書き換える。主役は以前にグラッドマスター・メリー・メルのMVにも出演したローレンス・フィッシュバーン。母校モアハウス大学をモデルにミッシオン大学という架空の黒人名門大学のフラタニティ（男性の社交クラブ）やソロリティ（女性の社交クラブ）を舞台にしたコメディだ。当初はこの映画の撮影に母校モアハウス大学が協力していたが、大学が「映画の内容が大学の尊厳を傷つけるかもしれない」と怖気づき、スパイクを追い出してしまふ。母校から酷い扱いをされたスパイクはショックを受けたが、アトランタ近郊の大学が協力してくれたことで、何とか映画は完成した。本作では大学を卒業したばかりのスパイクから手紙を受け取ったオシー・デイヴィスが、ギャラを格安に抑えてまで出演している。この映画で使用されたサウンドトラック曲「Da Butt」がビルボードのブラック・シングル部門で1位を獲得するなど、

ヒット曲も生まれた。

『ドゥ・ザ・ライト・シング』の誕生

そして1989年、時代は変わろうとしていた。音楽チャート誌ビルボードは、この年からラップ部門「ホット・ラップ・ソング」を開始。NYで生まれたラップが世界的に受け入れられるようになったのだ。かつて、ラップ専門レーベル「デフ・ジャム」の設立を描いた『クラッシュ・グループ』（1985年）の助監督になれなかったスパイクだったが、その映画の続編的な『タファー・ザン・レザ』（1988年）の監督を打診される。脚本を読んだスパイクは「ブラックスプロイテーションみたいにランDMCの3人が無意味に暴れるんだ。そんなのやりたくない。やるならパブリック・エナミーのアルバム『パブリック・エナミーII』みたいな意味のある作品に携わりたい」と言って断っている。

次作のテーマを模索する中、スパイクは2つの事件の記事に目を留める。「タワナ・ブローリー事件」（1987年）と「ハワードビーチ人種差別殺人事件」（1986年）だ。タワナ・ブローリー事件は、数日間行方不明になっていた15歳のタワナ・ブローリーが、住んでいたアパート近くのゴミ箱の中で意識不明の中、汚物まみれにされた上に、差別用語を胴体に書かれた状態で放置されていたところを発見されたというもの。強姦罪容疑で警察官らが逮捕されたが、「タワナの虚言」と裁判所が判断し、容疑者が不起訴となった事件である。ハワードビーチの事件は、黒人男性4人組の車がドライブ中に故障し、近くの白人移住地区ハワードビーチで助けを求めようとしたが、住民のイタリア系の若者たちといざこざになり、黒人男性のうちの1人マイケル・グリフィスが酷く殴られ、逃げようとした際に車と衝突して死亡した事件である。どちらもニューヨークで発生したヘイトクライムだ。

これらの事件にインスパイアされたスパイクは『ドゥ・ザ・ライト・シング』（1989年）の脚本を書き上げた。ブルックリンの黒人が多く住む一角でピザ屋を経営しているイタリア系の親子と黒人住民のトラブルを描いた社会派作品である。『パブリック・エナミーII』みたいな作品に携わりたい」と思っていたスパイクは、サウンドトラックにパブリック・エナミーを起用。オープニングから効果的に音楽が流れ、物語の要となった曲「Fight The Power」は、今でも人々に語り継がれている。まさにこの時代を代表する名曲だ。この作品の舞台となったブルックリンのベッドフォードロスタイベサントの街の外壁には沢山のメッセージが記されている。そのひとつが「タワナ（・ブローリー）は真実を話した」というもの。これは恐らく、この作品にも出演している俳優・監督オシー・デイヴィスの過去作品の影響だと思われる^{*}。この作品で、スパイクはアカデミー賞の脚本賞に初めてノミネートされ、国立図書館に永久保存さ

れる作品を決める「アメリカ国立フィルム登録簿」にも公開から10年後の1999年に登録されている。登録簿の条件が「最低でも公開から10年経った作品」なので、登録の異例の速さがこの映画のインパクトを物語っている。

こうして、黒人社会の声を代弁するブラックムービーの顔スパイク・リーは誕生した。彼は失敗を繰り返しながらも、その度に「僕は映画監督になるために生まれてきた」と奮起し、険しい階段を上り続けたのだ。この後もスパイクは、ブラックムービーの大きな流れを作っている。黒人社会の内側の声を自分たち自身が代弁することで社会を変え、黒人が大学で映画を学んでも、成功出来るということを証明したのだ。ここから近代ブラックムービーの歴史が始まっていく。

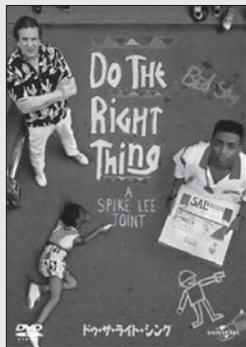
*1: Blaxploitation // 黒人が主役で、黒人から搾取している悪党へのリベンジを果たすアクション映画のこと。Blax (Blacks 黒人たち) + Exploitation (搾取) の造語で、黒人のイメージや黒人観客からお金を搾取するという意味もある。

*2: スパイク・リー映画には『ジョーズ・バーバー・ショップ』(1983年)以来関わり、『スクール・デイズ』(1988年)からプロデューサーに。スパイクとは『クロックカーズ』(1995年)まで共にした。一旦間が空いて、『インサイド・マン』(2006年)ではインタースhipのコーディネーターを務めている。

*3: 『シャーキーズ・マシーン』(1981年)の小さな役でデビューした後、スパイク・リーの『スクール・デイズ』(1988年)のアメリカンフットボール選手役で本格デビュー。『ドゥ・ザ・ライト・シング』(1989年)の物語の要となるラジオ・ラヒーム役が当たり役。90年代に入り『ニュー・ジャック・シティ』(1991年)のダダーマン、トビー・マグワイア版『スパイダーマン』(2002年)のロビー・ロバートソン役でもお馴染み。2016年没。

*4: タイトルは『Spike Lee's Gotta Have It - Inside Guerrilla Filmmaking』。日本翻訳本は『スパイク・リーの軌跡』(マガジンハウス)。

*5: 『ロールスロイスに銀の銃』(1970年)では、「Dope is Death (麻薬は死だ)」。『ゴードンの戦い』(1973年)では、「Free H. Rap Brown (H・ラップ・ブラウンを開放せよ!)」など。H・ラップ・ブラウンは、公民権時代にS.N.C.C (学生非暴力調整委員会)の議長を務めた後に、ブラック・パンサー党の幹部として迎えられた人物。



Do the Right Thing ドゥ・ザ・ライト・シング

1989

この当時、ニューヨークで起きていた様々な事件と変化に触発されてスパイクが書き上げた社会派ドラマ。黒人街にあるイタリア系一家が経営する小さなピザ屋を舞台に、悲劇が連鎖して起き、大きな暴動に発展していく。『トワイライト・ゾーン』（1959〜1964年）で「気温が35°Cを超えた暑い日には殺人事件が増える」というエピソードを覗いていたスパイクがその要素をミックスし、人種対立の一発触発の状況を上手く表現した。パブリック・エナミーの主題歌と共に、時代を代表する重要作品になっている。

監督●スパイク・リー
脚本●スパイク・リー
出演●ダニー・アイエロ、オシー・デイヴィス、スパイク・リー、ルビー・ディー

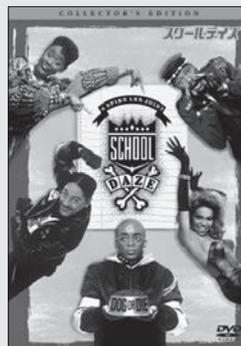


She's Gotta Have It シーズ・ガッタ・ハウ・イット

1986

黒人女性ノラと、3人のボーイフレンドの関係を描いたコメディ。スパイク・リー作品のメインテーマが「差別との闘い」だとするならば、サブテーマは「女性のセックス」であろう。ハリウッドには、黒人女性を「セックス・オブジェクト」として扱っていた歴史がある。セクシーさを売りにしていたのは「ライト・スキン」と呼ばれる肌の色の薄い黒人女優たちだったが、レイプ被害者を演じるのは、肌の色の濃い女優が多かった。本作では比較的肌の色が濃いノラが性を開放する様を描くことで、ハリウッドの悪しき風習と歴史に真っ向から立ち向かったのだ。

監督●スパイク・リー
脚本●スパイク・リー
出演●トレイシー・カミラ・ジョーンズ、トミー・レッドモンド・ヒックス、ジョン・カナダ・テレル、スパイク・リー



School Daze スクール・デイズ

1988

スパイク・リー自身の大学時代の経験を元に長年温めた脚本をコメディ仕立てにしたドラマ。冒頭から奴隷船の過酷さを訴える絵や著名な黒人活動家などのポートレートなどを見せ、黒人の歴史を振り返る。その先には、この映画の舞台となった架空の黒人大学があり、黒人コミュニティの中でもライト・スキンとダーク・スキンが競い合う。黒人として「目覚めよ！」と主張する主人公のグループと、主流に同化しようとするフラタニティ・グループが対立する。主人公が呼びかける「目覚めよ！」はスパイク・リーのスロガンともなった。

監督●スパイク・リー
脚本●スパイク・リー
出演●ローレンス・フィッシュバーン、ジャンカルロ・エスポジート、ティシャ・キャンベル・マーティン